

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年2月9日
【四半期会計期間】	第70期第3四半期（自 2022年10月1日 至 2022年12月31日）
【会社名】	大興電子通信株式会社
【英訳名】	DAIKO DENSHI TSUSHIN, LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 松山 晃一郎
【本店の所在の場所】	東京都新宿区揚場町2番1号
【電話番号】	03(3266)8111(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員コーポレート本部長 大西 浩
【最寄りの連絡場所】	東京都新宿区揚場町2番1号
【電話番号】	03(3266)8111(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員コーポレート本部長 大西 浩
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 大興電子通信株式会社 関西支店 （大阪府大阪市中央区南本町一丁目8番14号） 大興電子通信株式会社 名古屋支店 （愛知県名古屋市中区錦一丁目6番5号） 大興電子通信株式会社 関東支店 （埼玉県さいたま市大宮区宮町四丁目122番地）

（注） 印は金融商品取引法の規定による縦覧に供すべき場所ではありませんが、投資者の縦覧の便宜のため備える
ものであります。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第69期 第3四半期 連結累計期間	第70期 第3四半期 連結累計期間	第69期
会計期間	自2021年4月1日 至2021年12月31日	自2022年4月1日 至2022年12月31日	自2021年4月1日 至2022年3月31日
売上高 (千円)	24,414,448	24,655,775	35,472,811
経常利益 (千円)	593,841	398,593	1,607,128
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失() (千円)	339,585	97,037	1,233,275
四半期包括利益又は包括利益 (千円)	317,252	53,329	1,109,213
純資産額 (千円)	8,354,452	8,756,619	9,146,365
総資産額 (千円)	22,191,352	23,583,279	24,177,455
1株当たり四半期(当期)純利益又は1株当たり四半期純損失() (円)	24.89	7.29	90.38
潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益 (円)	-	-	-
自己資本比率 (%)	37.5	36.9	37.7

回次	第69期 第3四半期 連結会計期間	第70期 第3四半期 連結会計期間
会計期間	自2021年10月1日 至2021年12月31日	自2022年10月1日 至2022年12月31日
1株当たり四半期純損失() (円)	0.63	8.71

(注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益につきましては、潜在株式が存在していないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第3四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営む事業の内容について、重要な変更はありません。

2022年4月27日付で名古屋総合システム株式会社の全株式を取得したことにより、第1四半期連結会計期間より連結の範囲に含めております。同社については、2022年4月1日をみなし取得日としているため、2022年4月1日以降の四半期損益計算書を連結しております。

また、2022年12月16日付で株式会社CAMI & Co.の株式を91%取得したことにより、当第3四半期連結会計期間より連結の範囲に含めております。同社については、2022年12月31日をみなし取得日としているため、当第3四半期連結会計期間において、貸借対照表のみを連結しております。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第3四半期連結累計期間において、新たに発生した事業等のリスクはありません。
また、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについての重要な変更はありません。

2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において判断したものであります。

(1)財政状態及び経営成績の状況

経営成績に関する説明

当第3四半期連結累計期間における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）（以下「感染症」という。）による行動制限の段階的緩和等により個人消費に持ち直しの動きが見られる等、回復の兆候が見られました。一方で、ロシア・ウクライナ情勢を背景とした供給制約や急速な円安進行に伴う物価上昇、中国における感染動向やグローバルサプライチェーンへの影響も重なり、先行きは依然不透明な状況にあります。

このような経済状況の中、当情報サービス業界では、当面の情勢を見据えた商談機会の減少ならびに民需顧客層における設備投資の延伸が一部で見られる一方、ニューノーマルなビジネス環境への適応や新たな技術に対応する需要の増加に伴い、感染症対策としてのテレワークをはじめとしたリモート環境の整備・強化やペーパーレス化、クラウドサービスの活用など、IT投資については引き続き底堅く推移いたしました。

こうした環境の下、当社グループでは長期ビジョン「CANVAS（キャンパス）」ならびに中期経営計画「CANVAS ONE（2023年3月期～2025年3月期）」を実行中であり、「新たな価値提供への挑戦を続け、彩りのある企業へ」をビジョンに掲げ、人的資本を中心とした価値創造投資を推進すべく「五方良し」の経営に取り組んでおります。資本政策におきましても、資本効率の向上を目指した「CANVAS ONE」の基本戦略に基づき、株主の皆さまへの利益還元の実現を図るため、自己株式取得を決議し実施いたしました。

営業活動全般におきましては、未だプロジェクトに影を落とす感染症拡大による進行遅れやハードウェア、工事資材などの納期遅延が当社ビジネスへ複合的な影響を及ぼしておりますが、戦略商品「AppGuard®」の販売を中心としたセキュリティソリューションをはじめ、感染対策ソリューション、HRソリューション、法令改正に対応するソリューションなど、お客さまの様々なニーズに対応したソリューションの提案と販売に注力いたしました。

また、コアビジネスへの取組みに加え当第3四半期に連結子会社化した株式会社CAMI & Co. のIoT事業における技術力やコンサルティング力を活用することで「CANVAS ONE」に掲げるシン・ビジネス創出を加速してまいります。シン・ビジネス創出につきましては、M & Aによるシナジーの発揮に加え、当社では様々な素材に関する開発プロセスを定義し企画ならびに実行を推進しており、今後、新たなサービスへの投資につきましては適時にお知らせいたします。

グループ運営におきましては、技術者確保を目的として第1四半期に名古屋総合システム株式会社を、また第3四半期には前述の通り株式会社CAMI & Co. をそれぞれ連結子会社化いたしました。また、近年のM & Aでグループに迎えた各社（株式会社DSR、株式会社アイデス、ディ・ネットワークス株式会社）との一層の連携強化に取り組まれました。

一方、社内的には「お客さま第一」の方針のもとお客さまの経営課題の解決をご支援するために、「人の品質」「物の品質」「仕事の品質」の向上を目指し、組織を横断するタスクフォース活動による品質向上に引き続き取り組みました。

この結果、販売面におきましては、富士通株式会社および同社グループとの連携強化による新規商談および既存顧客からの受注獲得に引き続き努め、当第3四半期連結累計期間の業績は受注高285億90百万円（前年同期比114.2%）と伸長し、第2四半期に引き続き第4四半期につながる受注残高（受注後、未売上の契約額）が増加し、売上高につきましては246億55百万円（前年同期比101.0%）とM & Aによる増加もあり前期並みとなりました。

利益面におきましては、情報通信機器部門の売上高が減少した一方、プロジェクト管理の継続によりプロジェクトロスが減少していることや、公共分野から民需分野へのシフトに伴うソフトウェアサービスの売上増と収益性の改善により、売上総利益が前期より増加しましたが、営業活動や販促活動の経費が増加したことに加え、「CANVAS ONE」に基づく人的資本への投資（処遇改善、教育・採用費）やM & Aに関連する経費の増加もあり、営業利益3億52百万円（前年同期比64.7%）、経常利益3億98百万円（前年同期比67.1%）と減少いたしました。

また、資産効率化を主な目的として、1991年から東京都墨田区に所有し、独身寮として利用しておりました土地および建物（築31年/鉄筋7階建て46室）の売却決定により特別損失1億98百万円、連結子会社におけるデータセンター事業の統合による当該子会社が保有する固定資産の減損に伴い、特別損失1億53百万円を計上するとともに、法人税、住民税及び事業税ならびに法人税等調整額を計上した結果、親会社株主に帰属する四半期純損失につきましては、97百万円（前年同期は親会社株主に帰属する四半期純利益は3億39百万円）となりました。

事業部門別の業績は次のとおりであります。

なお、当社グループは、情報通信分野における機器の販売及びサービスの提供を行う単一の事業活動を営んでいるため、事業部門別に記載しております。

情報通信機器部門

情報通信機器部門におきましては、新規商談の増加もあり、受注高は74億75百万円（前年同期比124.5%）と伸長いたしました。ハードウェア販売を中心とする当部門は半導体不足による納期遅延の影響が比較的強かったため、売上高は56億95百万円（前年同期比90.3%）と減少いたしました。

ソリューションサービス部門

ソリューションサービス部門におきましては、受注高211億15百万円（前年同期比111.0%）、売上高189億60百万円（前年同期比104.7%）といずれも増加いたしました。同部門の内訳は以下のとおりです。

ソフトウェアサービスでは、底堅いIT投資への意欲を背景とした大型商談の受注が増加したほか、公共分野から民需分野へのシフトによる案件獲得が進展したことで、受注高は133億45百万円（前年同期比106.8%）、売上高は119億53百万円（前年同期比98.4%）と堅調に推移いたしました。

保守サービスでは、継続してストックビジネスの拡大を図ったことにより、受注高は50億46百万円（前年同期比119.0%）、売上高は50億53百万円（前年同期比120.7%）と増加いたしました。

ネットワーク工事では、ニューノーマルを契機とした移転プロジェクトなど大型案件の獲得もあり、受注高は27億22百万円（前年同期比119.0%）と大きく伸長し、工事資材の確保や納期確定に難航するケースも見られましたが、売上高は19億54百万円（前年同期比110.0%）と増加しました。

当社グループの四半期業績の特性について

情報サービス産業の特性として、ハードウェアならびにシステムの導入および更新が年度の節目である9月、3月に集中する傾向にあるため、当社グループの売上高および利益は、第2四半期、第4四半期に増加する特性があります。

財政状態に関する説明

当第3四半期連結会計期間末の資産につきましては、前連結会計年度末より5億94百万円減少し、235億83百万円となりました。この主な要因は、前連結会計年度末に集中した売上に係る債権が順調に回収されたことにより受取手形、売掛金及び契約資産が24億65百万円減少し、仕掛金が14億25百万円増加したこと、および減損処理により土地が2億34百万円減少したこと等であります。

負債につきましては、前連結会計年度末より2億4百万円減少し、148億26百万円となりました。この主な要因は、支払手形及び買掛金が3億33百万円増加したこと、および未払法人税等が3億72百万円減少したこと及び退職給付に係る負債が2億45百万円減少したこと等であります。

純資産につきましては、前連結会計年度末より3億89百万円減少し、87億56百万円となりました。この主な要因は、取得による自己株式の増加によるもの及び親会社株主に帰属する四半期純損失の計上によるものであります。

(2) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題、経営者の問題認識と今後の方針について

当第3四半期連結累計期間において、当社グループが優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題について重要な変更はありません。

また、当第3四半期連結累計期間において、当社の財政および事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針について重要な変更はありません。

(3) 研究開発活動

該当事項はありません。

(4) 経営成績に重要な影響を与える要因や問題点と経営戦略および今後の方針について

当社グループは、コンピュータメーカー各社および関連ソフトウェア会社、ソフトウェアパッケージ会社、システムインテグレータ、コンサルティング会社など多種多様な企業と競合関係にあり、今後、同業他社あるいは新規参入者との取扱い商品・サービス、業務スキル、技術面等での競争結果によっては、業績に影響を及ぼす可能性があります。

このような要因を解消するため、当社グループは「お客さま第一」の基本に立ち返り、「顧客視点」の営業活動を積極的に展開するとともに、コスト削減の推進に加え、会社体質の変革を進めてまいります。

また、感染症の影響による見積りの仮定につきましては前連結会計年度から重要な変更はありませんが、商談機会の減少ならびに製造業と流通業を中心とする広範な民需顧客層における設備投資の延伸が発生しており、今後も国内外の経済の低迷が長期化した場合は、当社グループの製品、サービスの需要が減少することで、当連結会計年度の経営成績に重要な影響を与える可能性があります。

(5)資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの資金需要は、情報通信機器等の仕入、ソフトウェア等の制作および人件費を主とする販売費及び一般管理費等によるものであり、これらを使用とする運転資金の安定的かつ機動的な確保を資金調達の基本方針としております。この方針に沿い、当第3四半期連結会計期間末現在、短期借入金26億円、長期借入金2億21百万円（1年内返済予定の長期借入金を含む。）を本邦内において調達しております。

当社グループは、売掛金の回収促進などの営業活動によるキャッシュ・フローの改善に加え、金融機関からの安定した資金調達により、当社グループの成長を維持するための運転資金を確保する方針であります。

3【経営上の重要な契約等】

当第3四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	47,900,000
計	47,900,000

【発行済株式】

種類	第3四半期会計期間末 現在発行数(株) (2022年12月31日)	提出日現在発行数(株) (2023年2月9日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	13,868,408	13,868,408	東京証券取引所 (スタンダード市場)	権利内容に何ら限定 のない当社における 標準となる株式 単元株式数100株
計	13,868,408	13,868,408	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金 残高(千円)
2022年10月1日～ 2022年12月31日	-	13,868,408	-	1,969,068	-	100,000

(5)【大株主の状況】

当四半期会計期間は第3四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(6) 【議決権の状況】

当第3四半期会計期間末日現在の「議決権の状況」については、株主名簿の記載内容が確認できないため、記載することができないことから、直前の基準日（2022年9月30日）に基づく株主名簿による記載をしております。

【発行済株式】

2022年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 669,800	-	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式 単元株式数100株
完全議決権株式(その他)	普通株式 13,177,700	131,777	同上
単元未満株式	普通株式 20,908	-	同上
発行済株式総数	13,868,408	-	-
総株主の議決権	-	131,777	-

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式35株が含まれております。

【自己株式等】

2022年12月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数 の合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 大興電子通信株式会社	東京都新宿区 揚場町2-1	669,800	-	669,800	4.83
計		669,800	-	669,800	4.83

(注) 当第3四半期会計期間末日現在における当社所有の自己株式数は、669,835株であります。

2 【役員の状況】

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第3四半期連結会計期間（2022年10月1日から2022年12月31日まで）及び第3四半期連結累計期間（2022年4月1日から2022年12月31日まで）に係る四半期連結財務諸表について、太陽有限責任監査法人による四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】

(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2022年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	7,529,445	7,687,243
受取手形、売掛金及び契約資産	8,168,882	5,703,076
機器及び材料	7,134	1,009
仕掛品	605,700	2,030,791
その他	704,573	1,093,591
貸倒引当金	2,278	711
流動資産合計	17,013,458	16,515,001
固定資産		
有形固定資産	1,574,904	1,250,378
無形固定資産		
のれん	315,187	403,374
その他	177,148	208,144
無形固定資産合計	492,335	611,519
投資その他の資産		
投資有価証券	1,569,924	1,758,119
退職給付に係る資産	593,137	604,689
繰延税金資産	2,457,654	2,329,988
その他	519,496	558,238
貸倒引当金	43,455	44,654
投資その他の資産合計	5,096,757	5,206,380
固定資産合計	7,163,997	7,068,278
資産合計	24,177,455	23,583,279
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	3,931,213	4,264,255
短期借入金	2,600,000	2,600,000
1年内返済予定の長期借入金	27,900	57,295
未払法人税等	374,636	1,944
賞与引当金	648,600	287,490
その他	1,810,755	2,181,992
流動負債合計	9,393,105	9,392,978
固定負債		
長期借入金	153,450	163,822
役員退職慰労引当金	39,515	80,740
退職給付に係る負債	5,209,374	4,963,916
その他	235,645	225,202
固定負債合計	5,637,985	5,433,681
負債合計	15,031,090	14,826,660

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2022年12月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,969,068	1,969,068
資本剰余金	134,892	137,251
利益剰余金	6,391,504	6,096,568
自己株式	54,950	306,778
株主資本合計	8,440,514	7,896,109
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	688,681	822,725
退職給付に係る調整累計額	22,342	6,410
その他の包括利益累計額合計	666,339	816,315
非支配株主持分	39,511	44,194
純資産合計	9,146,365	8,756,619
負債純資産合計	24,177,455	23,583,279

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第3四半期連結累計期間】

(単位：千円)

	前第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)
売上高	1 24,414,448	1 24,655,775
売上原価	18,542,879	18,641,580
売上総利益	5,871,568	6,014,194
販売費及び一般管理費	5,326,203	5,661,577
営業利益	545,365	352,617
営業外収益		
受取利息	230	241
受取配当金	37,413	42,744
助成金収入	17,810	9,929
その他	14,550	12,374
営業外収益合計	70,005	65,289
営業外費用		
支払利息	16,744	14,377
固定資産除却損	113	3 1,246
リース解約損	715	149
支払手数料	-	1,874
その他	3,956	1,665
営業外費用合計	21,529	19,313
経常利益	593,841	398,593
特別損失		
減損損失	-	2 348,860
固定資産除却損	-	3 2,224
特別損失合計	-	351,085
税金等調整前四半期純利益	593,841	47,507
法人税、住民税及び事業税	133,874	49,784
法人税等調整額	115,901	94,369
法人税等合計	249,776	144,154
四半期純利益又は四半期純損失()	344,065	96,646
非支配株主に帰属する四半期純利益	4,479	391
親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失()	339,585	97,037

【四半期連結包括利益計算書】

【第3四半期連結累計期間】

(単位：千円)

	前第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)
四半期純利益又は四半期純損失()	344,065	96,646
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	51,636	134,043
退職給付に係る調整額	24,823	15,932
その他の包括利益合計	26,813	149,975
四半期包括利益	317,252	53,329
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	312,772	52,938
非支配株主に係る四半期包括利益	4,479	391

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

第1四半期連結会計期間より、株式取得により名古屋総合システム株式会社を連結の範囲に含めております。また、当第3四半期連結会計期間より、株式取得により株式会社CAMI & Co. を連結の範囲に含めております。

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日、以下「時価算定会計基準適用指針」という。)を第1四半期連結会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。これによる四半期連結財務諸表への影響はありません。

(四半期連結貸借対照表関係)

四半期連結会計期間末日満期手形

四半期連結会計期間末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当四半期連結会計期間末日が金融機関の休日であったため、次の四半期連結会計期間末日満期手形が四半期連結会計期間末日残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2022年12月31日)
受取手形	- 千円	14,582千円

(四半期連結損益計算書関係)

前第3四半期連結累計期間(自2021年4月1日 至2021年12月31日)及び当第3四半期連結累計期間(自2022年4月1日 至2022年12月31日)

1 情報サービス産業の特性として、ハードウェアならびにシステムの導入および更新が年度の節目である9月、3月に集中して計上される傾向にあるため、当社グループの売上高は、第2四半期、第4四半期に集中、増加する特性があります。

2 減損損失

当第3四半期連結累計期間(自2022年4月1日 至2022年12月31日)

当社は、当第3四半期連結累計期間において、348,860千円の減損処理を行いました。減損損失を認識した資産は以下のとおりであります。

場所	用途	種類	減損損失額
東京都墨田区	社宅	土地及び建物	198,082千円
千葉県茂原市	データセンター	土地及び建物	150,778千円

当社グループは、減損会計の適用にあたり、概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小単位によって資産のグルーピングを行い、遊休資産については、個々の物件をグルーピングの最小単位としております。

上記資産は、売却が決定したことにより、帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額348,860千円を減損損失として特別損失に計上しております。

回収可能価額は、正味売却価額により測定しております。正味売却価額は、売却予定額から処分費用見込額を控除して算定しております。

3 固定資産除却損

当第3四半期連結累計期間(自2022年4月1日 至2022年12月31日)

特別損失の固定資産除却損2百万円は、売却を決定した茂原市におけるデータセンター設備の除却等に係る損失であります。

なお、営業外費用の固定資産除却損1百万円は、主に建物附属設備に係る経常的な損失であります。

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第3四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。なお、第3四半期連結累計期間に係る減価償却費(のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。)およびのれんの償却額は、次のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)
減価償却費	157,802千円	138,510千円
のれんの償却額	99,838	105,056

(株主資本等関係)

前第3四半期連結累計期間(自2021年4月1日 至2021年12月31日)

1. 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年6月25日 定時株主総会	普通株式	136,455	利益剰余金	10	2021年3月31日	2021年6月28日

2. 株主資本の著しい変動に関する事項

該当事項はありません。

当第3四半期連結累計期間(自2022年4月1日 至2022年12月31日)

1. 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年6月24日 定時株主総会	普通株式	204,678	利益剰余金	15	2022年3月31日	2022年6月27日

2. 株主資本の著しい変動に関する事項

当社は、2022年5月13日開催の取締役会決議に基づき、自己株式の取得を行い、この取得により自己株式は249,949千円(488,200株)増加いたしました。また、2022年5月13日開催の取締役会決議に基づき、譲渡制限付株式報酬として自己株式の処分を行い、この処分により自己株式は19,004千円(41,660株)減少いたしました。この結果、当第3四半期連結会計期間末において自己株式は306,778千円(669,835株)となりました。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第3四半期連結累計期間(自2021年4月1日 至2021年12月31日)及び当第3四半期連結累計期間(自2022年4月1日 至2022年12月31日)

当社グループは情報通信分野における機器の販売及びサービスの提供を行う単一の事業活動を営んでいるため、セグメント情報については記載を省略しております。

(企業結合等関係)

取得による企業結合

1 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社C A M I & C o .

事業の内容 システム開発及び販売、人材コンサルティング事業他

(2) 企業結合を行った主な理由

C A M I & C o . (キャミーアンドコー)は、I o Tの新規事業開発に強みを持ち、戦略コンサルティングからハードウェア開発、ソフトウェア開発、保守サポートサービスまでをワンストップで提供している会社となります。

当社グループでは、2030年度に向けた長期ビジョン「CANVAS2030」を策定し、「新たな価値提供への挑戦を続け、彩りのある企業へ ~Be Challenging, Be Colorful~」をスローガンに今年度より新たなスタートを切りました。そのファーストステップである中期経営計画「CANVAS ONE」を挑戦期と位置づけ「新たな価値創造へ挑戦し、新ビジネスの種を生み出す」活動を進めております。

C A M I & C o .の技術力やコンサルティング力を当社グループに迎え入れ、当社の営業力とのシナジーを発揮することで、当社グループのI o T事業や中期経営計画で掲げるシン・ビジネス創出の推進力を強化し、お客さまの価値ある仕組みを創造し企業価値向上を図ってまいります。

(3) 企業結合日

2022年12月16日(株式取得日)

2022年12月31日(みなし取得日)

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

(5) 結合後企業の名称

結合後企業の名称に変更はありません。

(6) 取得した議決権比率

取得後の議決権比率 91%

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として株式を取得したことによるもの。

2 四半期連結累計期間に係る四半期連結損益計算書に含まれる被取得企業の業績の期間

企業のみなし取得日を2022年12月31日としているため、貸借対照表のみを連結しており、連結損益計算書に含まれる被取得企業の業績の期間はありません。

3 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価 現金 188百万円

取得原価 188百万円

4 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

(1) 発生したのれん

144百万円

(2) 発生原因

今後の事業展開により期待される将来の超過収益力から発生したものであります。

(3) 償却方法及び償却期間

効果の発現する期間にわたって均等償却いたします。

5 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産 91百万円

固定資産 8百万円

資産合計 99百万円

流動負債 25百万円

固定負債 25百万円

負債合計 50百万円

6 企業結合が当連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす

影響の概算額及び算定方法

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(収益認識関係)

当社グループの売上高を部門・品目別及び収益の認識時期に分解した情報は、以下の通りであります。

前第3四半期連結累計期間(自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)

(単位:千円)

部門・品目		一時点で移転される財	一定の期間に渡り移転されるサービス	合計
情報通信機器		6,304,957	-	6,304,957
ソリューションサービス	ソフトウェアサービス	6,707,969	5,439,996	12,147,965
	保守サービス	658,011	3,527,372	4,185,384
	ネットワーク工事	1,718,586	57,555	1,776,141
小計		9,084,566	9,024,923	18,109,490
合計		15,389,524	9,024,923	24,414,448

当第3四半期連結累計期間(自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)

(単位:千円)

部門・品目		一時点で移転される財	一定の期間に渡り移転されるサービス	合計
情報通信機器		5,617,889	77,330	5,695,220
ソリューションサービス	ソフトウェアサービス	7,192,664	4,760,500	11,953,164
	保守サービス	831,823	4,221,237	5,053,061
	ネットワーク工事	1,528,540	425,788	1,954,328
小計		9,553,028	9,407,526	18,960,555
合計		15,170,918	9,484,857	24,655,775

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失()	24円89銭	7円29銭
(算定上の基礎)		
親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失()(千円)	339,585	97,037
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失()(千円)	339,585	97,037
普通株式の期中平均株式数(株)	13,645,456	13,303,859
希薄化効果を有していないため、潜在株式調整後1株当たり四半期純利益の算定に含めなかった潜在株式で、前連結会計年度末から重要な変動があったものの概要	-	-

(注)潜在株式調整後1株当たり四半期純利益につきましては、潜在株式が存在していないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

2【その他】

該当事項はありません。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

2023年2月6日

大興電子通信株式会社

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 並木 健治 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 忠津 正明 印

監査人の結論

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている大興電子通信株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の第3四半期連結会計期間（2022年10月1日から2022年12月31日まで）及び第3四半期連結累計期間（2022年4月1日から2022年12月31日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書及び注記について四半期レビューを行った。

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、大興電子通信株式会社及び連結子会社の2022年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する第3四半期連結累計期間の経営成績を適正に表示していないと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

監査人の結論の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。四半期レビューの基準における当監査法人の責任は、「四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

四半期連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

四半期連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき四半期連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した四半期レビューに基づいて、四半期レビュー報告書において独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に従って、四半期レビューの過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対する質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続を実施する。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。
- 継続企業の前提に関する事項について、重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められると判断した場合には、入手した証拠に基づき、四半期連結財務諸表において、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、適正に表示されていないと信じさせる事項が認められないかどうか結論付ける。また、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、四半期レビュー報告書において四半期連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する四半期連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、四半期連結財務諸表に対して限定付結論又は否定的結論を表明することが求められている。監査人

の結論は、四半期レビュー報告書日までに入手した証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

- ・ 四半期連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠していないと信じさせる事項が認められないかどうかとともに、関連する注記事項を含めた四半期連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに四半期連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示していないと信じさせる事項が認められないかどうかを評価する。
- ・ 四半期連結財務諸表に対する結論を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する証拠を入手する。監査人は、四半期連結財務諸表の四半期レビューに関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査人の結論に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した四半期レビューの範囲とその実施時期、四半期レビュー上の重要な発見事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は、当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBR Lデータは四半期レビューの対象には含まれていません。